

*Digest of Science of Labour*  
**労働の科学**

2 0 2 4  
*March*  
Vol. 79, No. 3



楢円 16-3P / 菅沼 緑

特集

## 企業内施設の役割と未来

安全考動センター / 東京電力ホールディングス株式会社  
全日空グループ安全教育センター / 全日本空輸株式会社

連載

タイプライターの歴史とタイプスト③

三宅章介

グリーンケアとリーガルケア④

細川 潔

労研アーカイブを読む⑨⑥

岸田孝弥

ILOインド南アジア産業安全保健通信⑮

川上 剛

つれづれなるままに

千葉百子 ⑮

自由と想像⑮

菅沼 緑

巻頭言

資本主義勃興期に真の篤志家あり

福島 章

# 労働の科学

2024  
March  
Vol.79, No.3

巻頭言

俯瞰 (ふかん)

資本主義勃興期に真の篤志家あり

福島 章 [大原記念労働科学研究所 常務理事]

1

表紙作品：菅沼 緑「楕円 16-3P」  
材料：合板にウレタンラッカー塗装  
会場：ギャラリーブロッケン (東京・小金井)  
年度：2016年  
撮影：菅沼 緑  
表紙デザイン：大西文子



## 企業内施設の役割と未来

安全考動センター

東京電力ホールディングス株式会社 ..... 5

全日空グループ安全教育センター (ASEC)

(ASEC : ANA Safety Education Center)

全日本空輸株式会社 ..... 9

Series

〈シリーズ〉日本スポーツ健康科学学会における職域の熱中症予防の取り組み(1)

熱中症予防指導士の養成 ..... 坂手 誠治 ..... 12

ILOインド南アジア産業安全保健通信 (15)

パキスタン、バロチスタン州の安全衛生ワークショップ ..... 川上 剛 ..... 16

「#教師のバトン」で伝わる (31)

教職員の過酷な勤務環境 ..... 藤川 伸治 ..... 19

グリーンケアとリーガルケア (4の1)

児童生徒編 (学校事故) ..... 細川 潔 ..... 22

## Series

- タイプライターの歴史とタイピスト (3)  
—「タイプライター」と「タイピスト」の言葉の定着と  
商品化第一号タイプライター ..... 三宅 章介 ..... 24

## Column

- 労研アーカイブを読む (96)  
家庭生活の基本である家事労働の  
エネルギー消費と疲労について検討の試み ..... 岸田 孝弥 ..... 30

- 労研アーカイブを読む (97)  
公衆衛生学と疲労研究 ..... 椎名 和仁 ..... 39

- 自由と想像 (15)  
楳円 16-3P ..... 菅沼 緑 ..... 49

- Talk to Talk  
静かな微笑み ..... 肝付 邦憲 ..... 50

- つれづれなるままに  
武蔵野逍遙 ..... 千葉 百子 ..... 52

## BOOKS

- 『北里柴三郎と高木兼寛—受け継がれるべき二人の医志—』  
我が国の衛生学の源流としての北里柴三郎と高木兼寛及びその交流 ..... 堀口 兵剛 ..... 57

- 『医師による面接指導マニュアル①』『医師による面接指導マニュアル②』  
面接指導について気づき・自信を与えてくれる ..... 廣 尚典 ..... 58

- 労働科学のページ ..... 59

- ろうけん川柳 ..... 63

- 次号予定・編集雑記 ..... 64

# 資本主義勃興期に真の篤志家あり

福島 章

19世紀、イギリスにタイタス・ソルトという人物がいた。彼は1803年、イギリス、ヨークシャー州モリーという小さな村で生まれ、父ダニエルが農業をやめて羊毛商を始める際に、いつしよにブラッドフォードに出てきている。毛織物工場に勤務したり、父親の商売を手伝ったりした後、1834年に毛織物生産者として独立した。彼の資本家としての成功は、1830年頃、リバプール港に放置されたままであったアルパカの毛を、特殊な梳綿機を使ってファッシュヨナブルで柔らかい布製品にしたことがきっかけである。

酷な労働環境をもたらすことになる。カール・マルクスが「資本論」を出版して、資本主義の仕組みや矛盾を鋭く指摘したのは1867年。産業革命の進展は、社会的不平等と経済的抑圧に対する労働者の反発を強め、労働者階級と資本家階級の対立が激化していった。

1830年代のブラッドフォードは、工業都市として急速に成長し、繊維産業の拡大によって人口が急増していた。街には工場や労働者の住宅が次々に建設されていったのだが、急速な工業化と都市化は、労働者階級の生活条件の悪化や過

資本家として成功したソルトは、しかしそこにとどまらなかった。1851年、彼は工場の煙突から出る煤煙で汚染されたブラッドフォードを離れ、ウェストヨークシャー州シプリーに向かう。後に「ソルテアミルズ」として世界遺産になる、繊維製造を1か所に統合するに十分な大きさの工場建設に着手した。工場を建てるに当たって、ソルトは労働者の福祉に真剣に取り組み、良好な労働条件の整備に意欲を燃やす。適正な給与の支払はもちろん、労働時間、労働環境に配慮し、住宅や教育施設、医療サービスの提供など、工場で働く労働者とその家族の生活基盤の整備に注力した。さらにソルトは、工場が周辺地域の美観を損なわなように配慮し、工場から出る廃棄物の処理にも注意を払った。こうした取組は、当時としては画期的なものであり、産業と自然の調和を実現したモデル地域として、世間の注目を浴びることになる。



タイタス・ソルト (1803-1876)

日本では、1880年代から1920年代初頭(明治後期から大正)にかけて、経済が急速な発展を遂げ、資本主義の勃興期を迎えていた。資本主義が跋扈すれば、どこでも同じ問題が発生する。1880年生まれの大原孫三郎は、1906年に倉敷紡績の社長になる。社長になった孫三郎氏は、従来の飯場制度を廃止して食事の手当は会社が行い、日用品の販売も開始した。工員の住居を集団寄宿舎から社宅に改め、駐在医師を置き、託児所を備え、社員勧誘用の映画を作る。幹部社員に大学・専門学校卒業生を採用し、会社の利益のほとんどを日露戦争で増えた孤児のための孤児院建設にあて、「わしの眼は十年先が見える」と言った。「資本主義勃興期に真の篤志家あり」は世界現象であろうか。



ふくしま あきら  
大原記念労働科学研究所 常務理事

